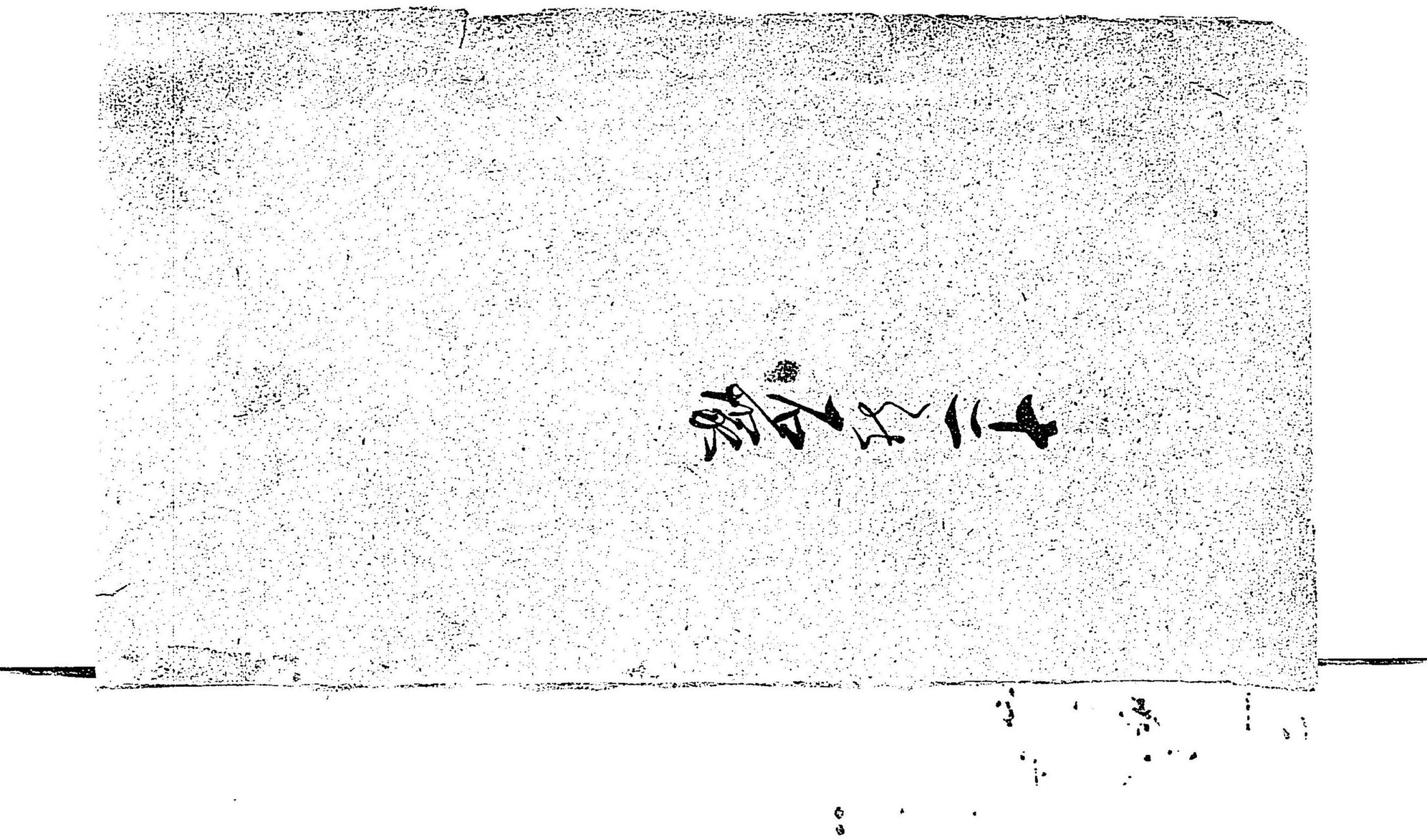
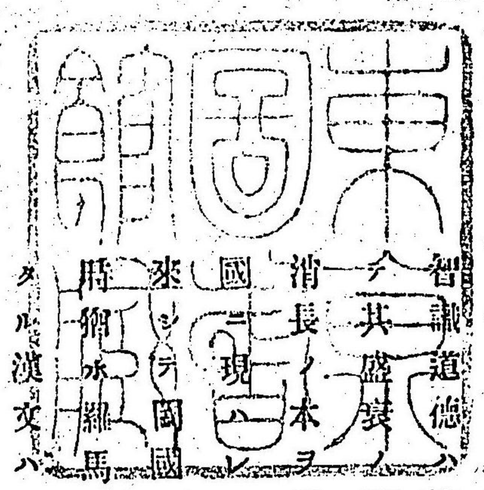


明治十八年十二月十五日內務省贈付

序



智識道德ハ言語ノ氣骨文學ノ神髓ナリ支那古今ノ文學ヲ歷覽シ人共盛衰ノ理ヲ究メ本邦文學ト稱スルモノヽ沿革ヲ考ヘテ其ノ消長ノ本ヲ推ストキハ容易ニ此ノ言ノ正當ナルヲ知ラン近ク我國ニ現ハレタル事實ヲ以テ之レヲ例証センニ往昔支那文學ノ渡來シテ國ニ行ハレントスルヤ之ヲ便ナラズト思フノ感覺ハ當時猶水縄馬字ノ行ハレントスル今日ニ異ナラズ之レカ爲ニ純乎タル漢文ハ漸ヤク一變シテ奇異ノ和漢文(古事記日本記三代實錄ノ如キ其例ナリ)トナリ更ニ進化(眞正ノ進化ナリ)シテ平假名文トナリタリ是レ日本ノ人心支那文學ニ叛キテ已レニ便利ナル新法ノ設立ヲ企テタル者ニ非スヤ然レトモ其成績見ルニ足ルヘキモノ無ク荏苒歲月ヲ經過シテ今日ニ至リ氣骨神髓共ニ强勁ナル西國文學ノ刺衝スルニ依リ此ニ始

メテ支那文字廢棄ノ運ニ向ヘリト云ハサルヲ得ズ其然ル所以ノ者ハ蓋シ當時ノ和文ハ數箇ノ原因アリシガ爲メ堂々タル道德ノ精神ニ乏シク浮華艶麗淺弱ヲ尊ヒテ自ラ女文字ト稱セラルヽノ地位ニ安ンセリ如何ニシテ彼ノ勁健正大ナル風ノ稍備ハレル支那文學ニ抗敵スルヿヲ得ンヤ單リ通常ノ文章然ルニ非ズ所謂和歌ナルモノモ同一ノ弊ニ陷レルモノト云ハザルベカラズ太古素戔嗚尊カ出雲八重垣ノ歌ヲ賦セシヨリ家持ノ萬葉集ヲ撰ムニ至リ又其ヨリ世々ノ敕撰ニ成レル歌集ヲ統觀スルニ間々忠君愛國ノ情ヲ詠シ父子兄弟夫婦ノ際ニ起レル德義上ノ感覺ヲ述フルモノ無キニアラヲド實ニ曉天ノ星ノ如ク寥々幾許モナシ萬葉集ノ如キハ素直ニ之ヲ見ルヘキモノナキニアラヲド上ニ云ヘルカ如キ非難ハ到底免ルヘカラズ況シヤ其レヨリ降リテ后ハ唯風流ヲ事

トシ美妙ヲ專ラトシ風容色澤ヲ貴フ其弊ヤ淫艶刻飾佻巧小碎ノ体ヲ成シ纖細見ルニ堪ヘサルナリ抑詩歌ハ心ノ花愛情ノ言語ナリ余曾テ古今ノ和歌ヲ取リテ其意義ヲ檢セシニ春曙秋月露花霜雪ヲ愛シミ世ノ變故ヲ悼ムノ詞若シクハ閨情ヲ述フルノ句多クシテ或ハ其艶麗愛スベク或ハ其情致憐レムベク或ハ其微妙ヲ愛スルノ細カナル殆ト我レヲシテ泣カシムルモノアリト雖社會ノ困厄ヲ憂ヘ人類ノ苦禍ヲ哀シム志士仁人ノ語何所ニカアル人性ノ高尚ナル部分ニ訴ヘ私ヲ排シ公ヲ翼襄シテ人心ヲ救ヒ絶大ノ眞理ヲ美妙高遠ノ詞花ニ飾リテ示スモノ何所ニカアル我レ未タ之レアルヲ見サルナリ是ヲ以テ觀レハ日本ノ詠歌ハ心ニ本キ愛情ヲ種トセシモノニハアレト其心モ愛モ未タ高尚ノ位置ニ至ラサルモノト云ベシ唐ノ樂天微元九ニ與フルノ書ニ云ク自レ登レ朝來

年(カタ)薗漸長閲レ事多與レ人言多論ニ事務一毎レ讀ニ書史一多求ニ理道一始知文章合ニ爲レ時而著ニ歌詩合ニ爲事而作一ト杜子美蘇東坡等凡ソ彼國ニ於テ詞宗タルモノ、所見概子此ノ如シ然レドモ我歴朝ノ歌人中此ノ如キ精神アルモノヲ見ル能ハズ豈慨嘆ニ堪フベケンヤ此ノ精神ノ乏シキヨリ起レル歌詩ノ弊枚擧ニ遑アラズ其薄弱ニシテ世ニ重セラレズ風人騷客ノ玩具タリシ原因此ニ在リテ存ス妄リニ古雅ヲ貴ヒ民俗ヲ蔑視シ詩歌ヲ唯特ニ社會ノ一小局部ニノミ行ハレシメタルモ之レニ職由スト云ハズンバ非ズ此ノ他我國近古ノ詠作論スヘキモノ多シト雖一小冊子ノ序言ニ盡スヘキニアラチハ略ス今ヤ百度更革ノ際文學ノ氣運漸ヤク一變セントスルニ當リ學者往々詠歌ノ事ニ注目シ議論稍喧シカラントス然レドモ或ハ美妙ヲ楽テ、鄙俗ニ流ル倔然新詩体ト稱スルモノヽ如キ是レナリ或ハ鄙俗ヲ厭ヒテ古雅ニ過キ博學ノ人ニ非サレハ童謡ヲモ解シ難カラシメントス俗歌改良家ト稱スルモノ是ナリ論者或ハ官ニ依リテ詩歌ヲ改良シ官ニ依リテ詩人ヲ摸造セントス其妄想此ニ至リテ極マレリト云フベシ斯ル有様ニテハ詠詩ノ改良望ムヘキニ非ズ然ラハ之ヲ如何ニセハ可ナラン乎曰ク詩ノ別才ヲ具ヘタルモノ出テヽ廣ク和漢泰西ノ詩ヲ學ヒテ一家新創ノ詩体ヲ成シテ世ヲ風靡スルニ在リ泰西諸國ニ於テ詩作ノ變遷多クハ傑然タル一個人ノ變体ヨリ生ス吾邦詩學上今日ノ急要ハ一家新創ノ詩人ノ現ハレ出ルヿナルベシ

友人湯淺吉郎氏頃日長篇ノ歌ヲ詠シ目ケテ十二之石塚ト云フユヘニダヤノ故事ヲ叙述セルモノニシテ日本ニハ未タ其類ヲ見サル史(イヒ)詩(ウタ)ナリ其体制新創ナルノミナラズ道德ノ感覺ヲ含ミ愛國正義ノ

氣ヲ吹破シ讀者ヲシテ感動ニ堪ヘサラシメン。トス余ハ今日ノ如キ茫々タル詠詩ノ沙漠ニ此作アルヲ見テ欣喜措ク能ハサルヲ覺ユ嗚呼此詩固トヨリ非難スヘキ所ナキニ非ズ然レ𪜈吾邦ニ在リテハ空前ノ作ナリ新創ノ事業豈疵瑕ナキヲ得ン余此篇ノ著者ヲ見ルニ所謂詩才ニ富メル人ナランカ望ムラクハ尚發憤厲精シテ思想ヲ煉リ詩情ヲ養ヒテ世ヲ風靡スル一家新創ノ詩人トナラレヨ

老杜曰讀書破萬卷下筆如有神ト蓋シ詩ハ別才アリト雖其培養ヲ要スルヿ此ノ如シ湯淺氏ハ明日發程シテ米國ニ留學セラレントス其ノ彼地ニ在ルヤ望ムラクハ西詩ノ蘊奥ヲ探リ名人文士ニ叩キテ其妙處ニ造詣シ句ヲ煉リ章ヲ鍛ヒテ今十二之石塚ニ開カレタル端緒ヲ繼キテ日本ノ詩歌ヲ一變シ余ヲシテ其大成ヲ祝スルノ喜ヲナサシメヨ嗚呼天父願ハクハ水陸共ニ此人ヲ保護シ留學ノ間其心身ヲ依助シ事業ヲ成シテ故國ニ歸リ主ノ聖榮ヲ輝カシメ給ヘ亞孟

明治十八年九月

植村正久識

十二の石塚
一回緒言
和歌の浦れ磯崎こゆる
ふら涙のしらぬむあしを
松陰の眞砂にふして
もとむともかひやあらん
玉津島姫
久のたの天つみろのに
むき遊ぶ聖靈の鳩れ
錦翼ふのらしめたまへ
我神よいざ行て見む
ユタヤの國原

岩もしるヨルダン川の
柳のけ高のやがくを
うせ立てさゞなみ涼し
千尋の青淵
朝日さすエリコの城れ
高樓もうづもるむのり
椰子の葉のえげるも深し
七里の白壁
千早振神の紀念と
ギルガルの岡べわさける
百合花れたてるも高し
十二の石塚

荒野

水枝さす楓のわの葉
影見えて池のほとりの
すゝしさに驢馬引とゞめ
休ふいも母ふやいわらぬ
ろの子のも十二のいしを
ゆひさして誰の記念ぞ
てい何ぞろの故あらむ
えらまゆし子の顔をてえをつ
問ひしたちちねの母のうれしさ
岩ゲ根の草のみどりに

すわりてうちゐたらふゝ

久方の天地つくる

神の友信仰の父

エブラハムイサクヤコブの

むりしよりイスラエルびと

すみ馴し牧場もあとに

エジプトの國をしいでゝ

いゐしへのヨセフを知らぬ

夷等の軍車も

堺太刀もなまりの如く

紅海の波ゐ沉めし

神の僕モーセの歌を

うたひあげて打や鼓れ

音高し舞や處女の

花のさね袖ふき返し

濱風も涼しくゐりぬ

夕日影殘る椰子の

木ぐくれの岩非くみふと

つどふめり羔野の原に

朝露のとくゐき出でゝ

鶉かり「マナ」をあつむる

民草もゐひく自由の

風はやみ照らしも果ぬ

稻妻や峯とゝろかし

鳴神のエホバの山を
あたとみておとろくまでゐ
いちしろくめもかゝやきて
雲間よりさすや日影の
のどけくも花野ゐわろぶ
峰のみつ牛のちゝさへ
野ゐ岡にあゞるゝ國ゝ
わゞ國と契約重く
いや高き雲の御柱
行けどゆきかえれど歸り
大御箱神のまゐ〳〵
司びと貝ふきあらし

武士に弓とりもたし
二つちにわかをつちあり
ねりゆけば妻ゝ子を負ひ
老人ゝ杖つきたてつ
おくをじといろぎに急ぎ
いろくなりさをや敵の
山といふ山をべてえて
川といふ川をべわたり
四十歳のなゞき旅路も
たてゐりり果ゐしものを
沙烟またや野嵐
立ちへちんあしき民草

枯きしよりモーセァロンも
空蟬の此世に見えず
あかゐけるかな

二回古塚

あつかしきカナンの國の
山のすそ水の行衛を
もとめくとうちあげむをば

エリコより二人のつかひ
歸り來て敵の本城も
ろの路もたちまちにけりな
唐錦旌旗ひるがへし
雲あして槍と槍とい

八

朝日さす林のごとく
くろがねの楯と楯とい
岩垣はかたくつらねて
武士のまずら武勇い
大將ヨシァのあとに
たたのひて水際わ下る
ありしもわれ百雷の
落るごとひびきし瀧の
音もたえ千尋の淵の
底みえてひだりみぎりわ
たらなゝの立分きゝ
一筋の道ぞいで來ぬ

九

司人荷ふ黄金の
大御箱てらす御前を
通むもの してけれども
いまゝとて十二の族
つきゝふすぎはてぬれば
大將ヨシアの御命
いと重き紀念の石を
りみをのべ此古塚い
何故ぞと後世のうまでや
てと問むヨルダン河の
岩たしる水さへせきし
我神れ今日の恩を

百世あも千々れ年あも
かくあごのくいやとてしへに
いひつたて傳んためふ
族よりとく一人づゝ
いたしねといへべろれとき
我族ベニヤミンより
ゑちびしいいとぶ奇しく
思ふちめど身まりたまひし
父ありきさをべ十二の
人たちい聖き石をむ
青淵のふりき底より
荷ひあげ一つの塚を

ひんがしの水畔にたてり
またさらに十二の石を
ゑちみとり今も我子よ
古柳なびくわたりを
ぶくもみよ根白高ゞや
生茂る西の岸より
さゝげ來てれ石塚とおん
おしにけるいざやきけかし
昔てろうたてかりけれ
賤の男ゞ渡る野川の
石橋とあさきしみをゞ
日の神い男神おりけん

處女子のつとふ岩井の
敷石とふるゝ見をゞ
月の神女神おるらじ
野の芝生森の下陰
偶像のたゝさる里い
なかりしといかゐ我子よ
大御神いからせたもふも
宜あらずや御命かしてみ
武士い エゾリコの都

アイの城白波さわぐ
ガリラヤ海邊の舟も
洞のうちゐ住北山の

敵までもやきうちゐしつ
「でふよりい雲井に見ゆる

ヘルモンは峯の雪かも

我國いうら清ちかお

治りぬユダヤの國の

あけゲたに獨きらめく

星ゐをや横雲消て

出る日の光の中お

かくをにしショシアの遺ず

鳥の跡ふりぬるとも

新い事もたゞ一卷お

つかねおかが十二のさつ矢

折るものいあらじとぞ思ふ

「ゐひきや住家もとむと

峯を越え谷をへだてゝ

おのがしゝ族〳〵お

ゐらむとぬ春のゐぶの雨の

とき過て夏來にゝらし

路れべの草花も枯れ

谷陰の青葉もえばみ

水無月の照日くるしき

アラビヤの荒野のかぜの

音とのみ聞ふし物を

人馬れわゆゑのひゞき

らやや近くヨルダン川の
おるたより淺瀬渡りて
襲ひ來るモアブの山の
野牛てふエグロン主を
ふせぐとて我族より
むらきものてゝろふりおてし
いとさとに丈夫いでぬ
「思ひみよ秋の山路の
闇の霜冬の岡べれ
松の雪みだを世おてろ
忠臣の名をもあちるき
ろげるかに汝ゲ父殊に

たけかりけん太刀風あちく
おだ涙のよせくるごとお
うち砕き追返しけゝ
岩岸の堅くも立て
あまたゝび戰ひたまへど
久方の雲にろびゆる
高櫻のたぞるゝ時お
一本れ柱のいかにさゝゆ
べきあたり見廻し
今ゝとて兩刀の劍
とりいでゝ僕をまねき
いひけらくてい短くも

我家おみがく傳ふる
形見とせむまたもや敵の
よせ來るぞ我とや死ぬん
やよやとくてゝをのがれて
かおらすも妻子おてをを
渡せかしまたいましにも幸福
あらんときゝて僕わ
言葉なく何んといらへも
ゑら露のたゝ涙のゑ
おちてたちにうたれし軀
よてたいり血潮流れて
槍おれ楯もうもるゝ

沙の上に兩手つきてゞ
頭さへゝゑはしえあげず
居たけるかくてわはてしと
おゆをよりてとゞせわしく
更おまた父いいへらく
我僕時おくれおゞ
がひるおきましてや汝わ
奴隸なりおからへゞとて
恥あらじまた神のため
人のためつぐさむときの
おきてとかわとくたゝずや
いまてゝふ死ぬるばかりを

忠とゐいはじとく〳〵ゆきねと
をてとゐもろのてとわりも
いやゝ高きのさねゝれ
命をべいるを得ずして
みつるぎを腰わとりはぎ
ゆく僕かへりをしつゝ
足引の山路ふいりぬ
「今わしもてゝろ安しと
あげとゝきの聲をさまにく
遠近の谷わひゝきて
八馬れ足並とゝのへ
りぎゝに車おし出し

夷等の群來るおかお
きりいりてのげてろ見えね
沙けふりゝふをのぎりと
戰ひけんたちいでたゞひし
を姿のすゞくもあるかお
をぎひだり二人の敵を
わきはさみあわやけわしき
岸べよりとぶよとみきべ
音たてゝみどりの淵ふ
ゝづみゝりてのありさまに
てゝろあき敵すらおろき
駒をめてあり物やめつ

ろぐのまゝに軍いとてぬ
名ゐしおふ神の民ゐる
イスラエルのますら武男れ
はしやも身い底の水屑と
汚るとも ヨルダン川の
のは波れきよき名ろい
さゞれ石の苔むす岩と
ならんまで千歳の下に
流るめれと人いふとゞ
されど子よ エグロンてろい
かゐしくも父と國との
仇なれまた此塚い

おりし世の神えの恩の
記念ゐり忘れなゆめと
いひおいり岩根を立て
夕日さす池のをきわれ
うろくつをおどろかさじと
靜にも今朝咲初し
花蓮枝手折り
眞白ゐる驢馬引よせて
わらゑべに手綱とちせり
岡越れ徑に友ゐる
無花果の青葉ごのくれを
かへりゆくてゐべニヤミンれ

族(やから)ある　ゲーラの　獨子(ひとりご)

エホデにて尙(まだ)てゝれつの
てゝのとよ母にひかれ
梓の弓　春の遊ぶ
いでしありけり
三回山村(やまざと)
奉る　國の　貢(みつぎ)と
千々に玉萬れ小金(こがね)
さゝげゆく御使なれば
おほざんの旅路あらずと
僕をあ一間につどひ
三日月れうくるゝあらで

山の端のをくらくあるい
もしやまた雨もよひかと
窓をあけふりさければ
天の原星ころ降しらめ
一むらの浮雲もなき
夏ひでり簾いきずとも
笠ぬきて面(つら)やかすあよ
玉はての道行あぞら
立ねむりねむりて杖い
すつるともまたきりとらむ
枝ぶはき木蔭に來れど
涼しくも岩間よりわく

水くまんうつとゝゐけど
手にむすびのむよしわらむ
今宵よりろの手をぬぐふ
手拭ゝ枕べちかく
よせあけとさけびあいつゝ
大のたゐ旅のろゐへや
果にけむ庖厨のかたゝ
ねゑつまり鼾の聲ゐ
高かりける時に二ホデゝ
臥し房より兩刃の劍
とりいでゝ忍ひ〳〵に
屋のむねのたか階ゐかゞ

上りけり窓のともし火
さら〳〵と影さしわたす
中庭の木の葉の色の
あをやかゐ匂も涼し
むは玉のやゑ夜の風に
麻蚊帳のかたよるゑゑゞ
ていいかに夘の花いろの
白かさね玉の帶さへ
まだとかずゑゝゆきべうり
ゑろ妙れ夜床の下に
たゞひとりひさおりふせて
いまゑるゝ母ゐぞありける

ある神よイスラエルびと
罪あらむろの罪ゆるし
今も猶エグロンつよき
手のわらむろの手をくじき
我民を救ひたまへと
斬るらしいのりのすゑに
かゐらずも我身のてをを
くをふらんかたじけあさわ
せきあへず落るゐをだい
よつゆ
殘露かも袖ぬらしつゝ
のぼりゆけむ夜やふけぬらん
我かどの苔むす路に

立犬
いぬ
れ遠壁いとゞ
ものすごく蔦
つた
とふ壁
かべ
を
とゐれつゝ蝙蝠
こうもり
ちかく
飛ぶよふ高屋
たかや
ぐうへを
立わりきエホデひろのに
思へらくむゐしのてとい
のねてより母のつげさせた
もふふて我よく知りぬ
あえきわれふたりの親れ
思ひ子と生きし日より
あらきかぜ露ふわてじと
いだきもちとでくまきにし

たちぬの袖をしをれぬ　三十

行んとてかたいざりせし

ころとゝや身まゐりたまいし

父きゝ母ゐいへらく

この剣もしもち歸る

僕あらべ彼を奴隷れ

くびきよりゆるしてやりね

いざさらばとてきを名殘に

戰場へとやゐけいりて

エグロンといたくたゝかひ

すゑついに淵の水屑と

ゐりたまふあときゐおしきかも

ろげためゐ自由の民と

ゐざれしかば山路をめぐり

寶劍をさゝげ歸りし

僕すらまたゐ汝ゐも幸

福あらむと仰せたまひし

御言葉をくりかへしつゝ

いまもかも父ぎむかしを

ゐつかしみ神のためとて

青淵の底に沉みし

玉ゐをべおしといいとで

音にゐきぬあはきかゐしきかも

ろの頃より石か枯木か

目ゝわきど頭頂ゝわざる
群鳥をおいもはらわず
手ゝわれど膝間ゝ萌出る
芝草をぬきも得やらぬ
偶像の世とゝふたゝび
ありしとぞわれかおしきゝも
今霄とや明日ゝわけおん
國の敵父の仇も
神のため刺にさゝをず
いくろたひ形見の劍
ぬきてもおはぬきみまく
はし月夜くつぬきすてふ

神の前ひざまつきてぞ
いのりけるふもとの里れ
庭鳥の八聲もたえて
天の戸のいつ明にけ舞
樹欖の山ゑげやま
みあぐれゝ雲居ゝ高き

エルサレムふりぬる城の
石垣にさし昇る日の
影をうけて空ゝ群立つ
山鳩の數ぞしられぬ
をゝろせゞ貢物の重荷
つきゝにいや荷ひいで

僕らい大路せまし と
並ぬたりされぺェホデい
人しれぬをきの腰おる
寶劍を上衣のしたに
かくしもち高屋を降り
僕らをさきにおくりつ
いまとて別るゝときゐ
やよェホデ腰の寶劍ゐ
てゝろせよと母いいひつゝ
氣高くも奥ふかいりぬ
子を思ふ鶴の一聲
武男のてゝろもいとど

をたれ蘆の葉ごのくきをれぺ
のゐしくも歸らぬをづの
底深をろてのおもいを
いのゐしして母やしりけん
ゐかいあをと神にまかせつ

貢物　荷ふ僕等

ゐたゞへていまやェホデハ
椰子の城ェリコをさしてゞ
いろぎゆくろもェリコなる
古城いヨシァのときに
はろばされ野獅子山猿
住家ゐす椰子れ森とも

あれにしを十まり八歳の
ろの昔エグロン王は新
城をふたゝびてゝに
建しとゞヨルダンかはの
川原にて敷石ゑらみ
レバノンの谷よりはてぶ
槙柱ふとしき立る
殿の内にエザブトの書を
きさむとて指環の小金
襟の玉イスラエルより
うむふとやわさましきかも
天殿の御座あたゝかく

綾錦たるゝ帷ぶ
雪の日も冬をおはえず
奥庭の御階すゝしく
白玉のぬける籠ぶ
水無月も夏をわすれて
暮ずめり霞をわくる
佐保姫も志らをぬ春の
花盛霧にかくるゝ
立田姫まだみぬ秋の
紅葉狩めつらしからぬ
物ぞあかりき

四回舊城

とるしくとふもとを見をろ
深をぞどり木の間〳〵ゐ
白壁のわずかゐ洩れし
大城の正門まぢかく
ゐるからに貢の重荷
ゐろさせて塵うち拂ひ
汗ぬぐひ暫時エホデい
道のへの葡萄の棚下に
涼しくも皆僕等を
いてはせてひとり正門の
鐵門ゐゆき案内とていつ
門守の後よりいれを

門毎ゐ槍をよてたへ
楯をもち兵士ゐまた
たちゐらぶいゐゐく軍馬の
立つををび戰車ゐ備へ
たる廣庭過て
大殿の御階の下に
いたりしホエグロン王い
御座に在りちかく侍ふ
勇士い猛のごと
をゐへりて蝮のごとく
疾視たる面樣てろはゐ
ろしけを白き山羊の

皮きたる狼あらずい
くをみるのいとら花さく
園にいる蛾とやいもむ
からにしき身ふしまとへば
中〳〵お夷の風体ぞ
見えまさるいかにもおして
御座近くのぼらん物と
捧げてし國の貢物の
奇玉や黄金あらねど
千々に思ひ萬にてゝろ
くたけともせんすべをなを
去のはあをエグロン王わ

いと厚く欺待されしを
侍としてエリコの都
いでにけり時にエホデの
いまけらく我猶思ふて
とあれば暫時てゝに
とぶおらん速くおごとも
のえりねといとねむごろに
仰せらきかゝおもひ
わきげたくおん顔色も
たゞあらず見ゆる物から
何處までもまけて御供
いたさんといちへ申せば

とく行けといきまきたまへば

僕等も皆家路ふぶ

のぼりゆる空とふ鳥も

ねくらもとる一本高く

椰子の樹のたてる山路を

越くれい岩根あらはを

水無月の枯野の原に

咲百合の賤ぶの朝飼の

烟とも明日い消ぬん

花ぬぐらてれふくちべい

宮人の袖のにしきも

光ぬく一枝手折り

敷島の大和の兄弟に

ちくりぬぐいかわれと

詠むらん物思ふ身は

はうぬきいゆくともぬしに

花鳥の情もしらず

何時の間ぬ八里遠く

なりしわや近く聞ゆる

潮水の音におどろき

ぬのむをべはやキルガルの

岡わきぬ看れい十二の

石の塚聽けいヨルダンの

波の音いつれふしても

父君の昔をしのび
我神の舊恩を思ふ
便りなる木陰ゐたふき
あゝ神よ父の仇とのみ
おもはずたゞ國の敵と
おもへせよ名譽の念を
うち消してまことの勇氣
たまへきと祈禱おさきだ
かしてくも神の聖靈や
光臨けん再びエリコに
とゞせのぼり御階の下にて
我王につゞ申すべき

秘事あり人を去ぞけて
きゝたまへいと幸福あらむ
あれとくてのよし聞へ
あけられよと高らかにいへど
去とし待ねと近習
奥にゆきやゝ時過ぎて
出來りいざてなたへと
いざるふて御階を昇り
庭ゐいでるかき廊下
すきとてゝ涼殿まで
案内あしもと來し方へゐ
かえりける芭蕉の廣葉

ひるかへし吹入る風れ
涼しさゐ　エグロン王い
北窓の隙戸おし開き
藤牀ゐ猶うち臥して
いませしかエホバの神の
御命なりといふ一聲に
おとろきて身をこへす間に
上衣もておはひしみぎの
腰よりぞあいや右手ゐ
寶劍をぬくよとしげ
はや王の胸板ふかく
刺し通し　鎧　脊ゐ

あまりけける背のまくらも
眞白ゐるるやのむしろも
くれなゐの血しほゐ染て
凄しくげゐ肥へふとる
白牛を　屠るごの如し
思ひきやペニヤミンなる
族にい多しと聞けど
エホデまで左手利捷にて
我神の奇しき器と
あらむとい　エホデひろかに
立いで〳〵涼殿の戸
のたくぢ廊下つたひ

庭をすぎ御階くだるべ
夏の日れ午の暑熱の
たへのたく唾りやすらむ
御垣守楯をまくらに
槍をすてとてろくに
いたりしもとがめらるゝ
てともなく城れ門外まで
いでにけりたぶちに椰子の
林よりはやしにいりて
西山のすろ野の原に
うけゆけど何事ぞやと
羊牧者顔を合せて

行先に立ちふさがりぬ
我エホデ今日エグロンを
刺てろせりいまよりゆきて
エフライムのますら武男等
かりあつめ今宵エリコに
くたるべしとく汝等も
野に山に腰の角笛
ふき鳴らし我族より
殊更に多くありめて
ヨルダンれ津にくだり
川上の浅瀬をゑらゝ
石をりみ沙をはみびて

行水をせきとめおきけり

敵人のわたるに便利

よくおさむおり〳〵奇しき

功あらむとまたかけ出し

山路より山路にかゝり

はせ去りぬ之をむきゝて

羊牧者かたみにいざと

いゝかいし分きちりしぞ

近遠の峯もとよみて

吹たつる角笛に音に

山彦も聲うちろへて

すさましきかも

五回　溪流

御垣守二人いで來て

みぎひだり立分れつゝ

廊下の敷石の上を

立ありきいま涼殿を

み廻りしに人聲もあく

戸い閉たりはや青年い

歸へりしやと問へい一人ぞ

いらへしていつかへりけん

玄らねども王にい猶問も

神言を獨おもふて

いますらんさあくい例の

午睡して國に殘しゝ
姫君の夢やそるらん
やよやそよ西の高峯ゝ
日いりぬとゝかくけふゝ
ゝろうらすやみゆるしゝくも
涼殿いざ明てみんと
立よりて楯と槍とゝ
かたそらの一人にわたし
槇の戸をおしわけ見れゝ
蟬の羽のうそき御衣も
玄ろかねのゝん冠も血
にろそて軀ゝしたに

たよをゝりゝゝろもいかにと
かけ上り嚴しくならす
高樓の鐘れひゞきに
何事ゝとゝわて噪ぎて
おゝく庭の涼殿へと
つとひ來るゝりから聞ゆる
鯨波の聲ゝゝさしく
イスラエルの國人ゝるらめ
門守をとくゝめして
問そやと喚る聲も
果ぬ間に夜風そげしく
火ゝてりて殿より殿ゝ

もえうつり城ハ焔とぞ
にけり烟をくゝり
火をふきてエホデハさきに
進をいりぬちをうちして
敵びとのにぐるを追す
戰ふたりうれひゝきにハ
山もさけろの光にハ
空もてげエリコの城ハ
うつせをの此世ながらの
地獄かも見るまに灰とぞ
あれりけるさてのゞをゆく
夷等のかへりをすれど

山の端にいる弓張の
月あらぬてゝろぼろくも
むべ玉の夜路わくらく
やうゝゝ津をたづね
川岸にぬりたちをれば
水浅し今霄の僥倖ハ
てれのをとぬりむ渡りし
ぬりしもあれ石のくずるゝ
音高くよせくる激浪ハ
あゞさきて岩にくたかき
叫びおふソトムゴモラも
かくありけんてれよりさきハ

川邊まて敵追下し
ひろかゐもエホデいいろき
水上ゐ積みゐし
石をくづさせてまた岩岸ゐ
のぼりたち角笛たかく
吹あらせべいくらともおく
たきいたす蘆火の影の
きらくと波ゐうかびて
敵人の行衛さやけし
名ゐしおふ死洵のうみに
潮かぜはからもとゝめず
志づむらし西の岸ゐい

イフライムは勇士多く
椰子の葉をのたに荷ふて
ひんぎのしの岸にいあまた
ベニヤミンの武士たちて
橄欖は枝を手ゐもち
年少きエホデをあげて
國民の士師と
あふきつゝモウセの歌を
三たびまでうたひあげたる
よろゐみひは聲猶淵ゐ
殘りけり皆もろともに
エホデをバケラの家まで

送らむと山邊を遠く
見渡せど夜もむや明て
朝日影さしむのひたる
ギルガルの紀念の石れ
あたりより空ゐ群立つ
山鳩のろの數十二
ある ぞわやしき
わわき我ろの・鳩れでと
翼あらいユダヤの國れ
いふしへれ神の恩惠を
つげむためいざかえちゐん
うらやすの國ゐ

明治十八年の六月　湯淺吉郎

誤　正

序文

三丁十二行　來ッ　來（コンカダ）
四丁一行　年　年
七丁二行　依　佑

本文

四丁十行　境　燒
五丁七行　羔　荒
七丁十二行　へ　く
十六丁九行　闌　菊
廿五丁四行　し　餘字
廿七丁十一行　膝　餘字
四十二丁八行　飼　餉

明治十八年九月廿二日御届
明治十八年十一月十日　出版

定價六錢

著作兼出版人　群馬縣平民　湯淺吉郎
群馬縣上野國碓氷郡
安中驛五百卅番地住

25
2

25
2

087979-000-4

25-2

十二の石塚

湯浅　半月／著

M18
DBG-0069

明治十八年十一月十五日收結者始付　朱印